

● シリーズ 私の見た日本 Vol.190

外から内へ、過去を今日のものに
日本とフランスの都市文化建築体験の違い

Celine Jamin (セリン・ジャメン)



京都大学大学院・地球環境学舎・博士課程在籍。修士(地球環境学)。専門はヴァンキュラー建築と伝統工芸。博士研究テーマは「伝統建築の気候問題に対する適応」。ダブル工科大学卒業後、フランス、アイルランド、コートジボワール、日本の建築事務所に勤務。日本在住歴4年

多くの観光客、特にヨーロッパからの観光客に、日本は技術の進歩に加え、現代の生活様式と伝統的な生活様式が単に共存するだけでなく、調和している代表的な場所として捉えられている。特に、日本建築の伝統は国の文化を尊重し、人々の日常生活に役立つものとして継承されていることに私は感銘を受けた。

本稿では、日本とフランスの伝統建築の違いについて考察する。日本とフランス、それぞれの文化的視点から都市の建築がどのように認識されているのか、その建築が環境にどのような影響を与え、影響を受けているのか。そして、その伝統建築への理解が今日の社会を改善するためにどのように役立っているのかについて述べたい。

伝統的な日本建築

「京町家」として知られる京都の町家は、京都の街を形成する重要な要素の一つである。かつては大規模な解体の危機に瀕していたが、現在は日本人と外国人両者からの関心を取り戻している。標準化された時代において、伝統的な建築はコミュニティのユニークなアイデンティティ形成に貢献していると同時に、そこを訪れる者にとって、伝統的な価値観を共有するための重要な要素である。加えて、多くの人々は真の美しさや正しさ、そして建築に具現化された日本のアイデンティティの根源への再帰を求めて、町家を保護し、修復している。

日本建築の現象学

日本の伝統建築は、空間のモジュール化、木や土、漆喰などの有機的な素材の使用、

空間の純粋な幾何学的分割、中庭と自然の融合、さらに床の間などに見られる空間の象徴性など、すべての要素が訪れる者の感性を魅了し、伝統的な空間での体験を肯定的にする。日本人の精密さと注意深さからつくられる厳格な伝統的工芸品や建設技術は、伝統的な空間に確かな高潔さを与え、国内外から高く評価されている。私が高く評価している日本の家のもう一つの側面は、中庭である。建築のなかに可能な限り小さい自然を含めることで建築全体が有機的特徴を帯びてくる。ヨーロッパでは、屋内から外に広がる雄大な風景を楽しむために建築や空間を設計しているため、フランスの家は敷地の中央にあり、周りを庭に囲まれている。自然空間は重要視されているものの、デザインの観点からは必須の要素ではない。それに対して、日本では中庭は瞑想を促す場でもあり、精神的行為とつながっており、そのような精神的な次元をもっているがゆえに、空間の構成に必須なものとして扱われている。

興味深いのは、日本人は自然によって自分たちの生活が制限されていることを理解しているという点だ。部屋は外の素晴らしい自然の景色が可能な限り見えるように配置されている。自然に対する力を主張するのではなく、調和することで自然と共存しているの

ある。ある家の路地裏を見てもそれは明白である。

伝統的な日本の家屋は内から外への多方向のベクトルをもち(図1)、内部と庭の間の移行は縁側を通じて徐々に行われる。多目的で、曖昧な方法で区切られた空間である縁側のデザインは興味深い。庭とプライベートな生活空間をつなぐ、調和のとれた空間である。このような内と外をつなぐ機能をもつ空間は、フランスの家には存在しない。

同様の現象学的経験を神社、仏教寺院、城などのより伝統的な日本の公共空間でも体験した。儀式を重んじる表現や伝統は、その空間に長期にわたって畏敬の念を抱かせるため、地域の人々にとっても重要な場となる。京都での私のお気に入りの場所の一つは、切り取られた庭園の景色を臨むことのできる静寂な圓光寺だ。風景の端にある赤い絨毯は、庭園の荘厳さを際立たせ、まるで赤いクッションの上に宝石が飾られているかのように庭園を引き立てている。

フランス文化建築

フランスの大都市では、伝統的な建物を見られる場所は限られているうえ、特定の種類



①伝統的な京町家からの中庭の眺め ②土でつくられた伝統的なフランスの家の外庭からの眺め ③京都の圓光寺庭園の眺め ④京都市下鴨周辺の家の裏 ⑤パリのオスマン住宅型建築 ⑥パリの歴史的建造物(パリ市庁舎) ⑦京町家で日本文化を学ぶ留学生グループ

の建造物のみとされている。そのほとんどが生活に根差した一般的なものではなく、記念碑的な役割をはたしている。日本では町家のような住居としての伝統的な建築が都市に存在しているのに対して、フランスの都市部では伝統的な住居はほぼ完全に姿を消している。

フランスの伝統的な建物は、日本とは相対して日常的な使用の観点からではなく、歴史的な観点から重要視されている。そのため、フランスでは歴史的建造物は良好な状態に保たれ、国の偉大さを想起させるものとして存在する。たとえば、ジョルジュ・オスマンによる建築群は、1848年以降に皇帝ナポレオン3世の要請により、パリに偉大な地位を与えるためにつくられたものであり、オスマンの建築群のファサードは、優雅さと強さを連想させる高貴な素材である切石でつくられている。このように、帝国の偉大さと建築群の相関は非常に明確であり、この点がフランスと日本の建築の主な違いを象徴する一つである。フランスではある時点を凍結すること、つまり、最盛期のフランスの偉大さを象徴しており、日本では一貫して存在している状態、つまり、現代への日本の伝統の流動性と継続性に焦点を当てていると言える。

日本とフランスの建築の比較

私は意図的に、日本には「伝統的」(Traditional)、フランスには「歴史的」(Historical)という2つの異なる概念を用いる。日本の伝統的概念は日常生活に組み込まれながら追求されてきたものであり、フランスの歴史的概念は偉大な時代を保存するためのものである。日本では大工や左官職人などの専門家をはじめ、建築に関連する儀式に至るまで、伝統的な専門知識が空間の完全性を確保するための鍵となっているのに対して、フランスでは建物の美しさや真実性の概念が重要視されており、この点において、日本とヨーロッパは相反するものとして捉えられる。日本の伝統的建造物における伊勢神宮の式年遷宮のような概念は、フランスでは建物の真実性の観点から問題とされ、よく議論される。

伊勢神宮は元来の儀式に従いながら、20年に一度約1,300年の長きにわたり遷宮を繰り返してきた。フランスではこのような方法は考えづらく、歴史的建造物をありのまま保存することが、再建することよりも好まれる。

2019年に火災に見舞われたパリのノートルダム大聖堂を復元する方法の議論がまだ

進行中であることから、この概念が理解できるのではないだろうか。

フランスでは、一般的に文化遺産が失われたとき、消滅したとみなされ、複製は価値が下がるという考え方が一般的である。それとは対照的に、日本では同年に沖縄の首里城が火災により正殿などが焼失したが、その再建はすでに進行中である。

どちらの文化建築へのアプローチも、それぞれの主要なアイデンティティを誇り高く表現する特徴を持っている。しかしながら、持続可能性を確保するための日本伝統建築の強みは、現代まで活用された状態で建築を使用する人の関係性を保ってきた点であると思う。まさにオリジナルの原則の整合性を維持しながら、現代の人々のニーズに適應できる建築である。高い保存状態と日本の真実性への姿勢は、世界中からの観光客にとって非常に魅力的であり、伝統的建築は、日本の文化を伝える最も素晴らしい方法の一つであると言える。

翻訳：京都大学大学院地球環境学舎修士課程学生 森川文太

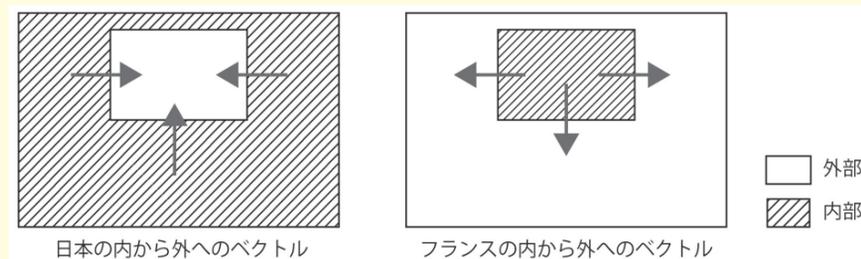


図1